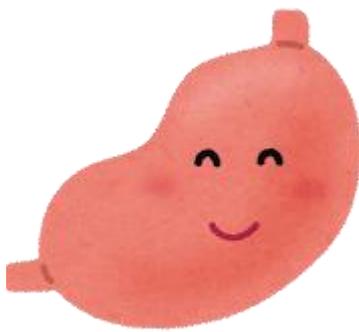


## 「機能性ディスペプシア」とは

平成 27 年 5 月放送

林 信太

今日は「機能性ディスペプシア」についてのお話です。「機能性ディスペプシア」と聞いてもピンとこない人がほとんどだと思います。「機能性ディスペプシア」とは、慢性的に胃の痛みや、もたれ、すぐにおなかがいっぱいになる、などの、みぞおちを中心とする症状があるにもかかわらず、内視鏡検査などをし



ても、食道や十二指腸などに異常が見つからない場合に使われる病名です。簡単に言えば、いろいろ検査しても異常がないのに「どうもおなかがすっきりしない」ということです。日本人では「この機能性ディスペプシア」を、少なくとも10人に1人が発症していると考えられています。

「機能性ディスペプシア」はきちょうめんな人や、周りに気を使う人に起こりやすく、ストレスが誘因になることが多いと言われています。また、胃酸の刺激、食生活の乱れ、ピロリ菌の感染などが関係しているとも言われています。これがきっかけとなり、胃の「運動機能異常」や「知覚過敏」を起こし、いろいろな症状が出るのです。

胃の「運動機能異常」があると、食べ物が食道から胃へ入ってきても、胃の上部がうまく膨らまなくなり、食べ物を胃の中にためることができず、すぐにおなかがいっぱいとなる「早期満腹感」や「痛み」などが起こりやすくなります。また、胃に入った食べ物は胃の中で消化され、胃が波打つように動く「ぜん動運動」によって十二指腸送り出されます。この「ぜん動運動」が障害され

ると、食べたものを十二指腸へ送り出すのが遅れて、胃に残るようになり、胃もたれとして感じられるようになります。

胃の「知覚過敏」とは、胃が刺激に対して痛みを感じやすくなっている状態を指します。「知覚過敏」の状態では、少量の食べ物が胃に入るだけで胃の内圧が上昇し、おなかがいっぱいと感じたり、胃酸が特に多くなくても、胃酸にたいして胃が過剰に反応して、痛みや灼熱感などを感じる場合があります。

「機能性ディスペプシア」の診断には、慢性的に「胃のもたれ」や「早期満腹感」「痛み」などがあることが条件ですが、それだけでは、まだ診断できません。少なくとも胃の内視鏡検査で胃潰瘍や胃がんなど、症状を引き起こしている病気がないことを確認する必要があります。

治療は薬物療法が基本です。消化管の運動機能をよくする薬や、胃酸の分泌をおさえる薬が第一選択となることが一般的です。それでも症状が良くならない場合には、漢方薬を併用したり、ストレスが原因と考えられれば、「抗うつ薬」や「抗不安薬」が使用される場合もあります。

また、ピロリ菌に感染している場合には、除菌治療が勧められます。たとえ、ピロリ菌が「機能性ディスペプシア」の原因でなくとも、除菌により、今後胃潰瘍や胃がんになる確率を減らすことができるからです。また、「機能性ディスペプシア」の患者さんは、睡眠が不足していたり、食事時間が不規則であったり、野菜の接種不足などが見られる傾向にあり、高カロリー・高脂肪食を避けることも含め、生活習慣を見直すことも、症状を改善するのに有用です。